

2025年2月22日

古代におけるユダヤ人の誕生

日本聖公会横浜教区 信徒神学校 第30期

長谷川修一

(立教大学文学部キリスト教学科)

本講演の構成

- 1. はじめに
- 2. 聖書のユダヤ人とは
- 3. イスラエルからユダへ
- 4. ユダからユダヤへ
- 5. おわりに

1. はじめに

現代イスラエル国家の形成

- 現代イスラエル国家とユダヤ人
- イスラエル独立宣言 (1948): イスラエル = ユダヤ人民主義国家
- ポグロム (ロシア語「破壊」) の激化 (19世紀以降)
- シオニズム運動の高まり (シオン = エルサレムの別名)
- →パレスチナにユダヤ人の「ナショナル・ホーム」建設を目指す
- ユダヤ人とは誰か → 聖書のユダヤ人の子孫という前提

2. 聖書のユダヤ人とは

聖書の物語

- アブラハム → イサク → ヤコブ (イスラエル) → 12人の息子 → イスラエル 12部族 (創世記)
- ユダ族
- 土地取得の物語 (出エジプト記からヨシヤ記・士師記)
- 王権の誕生 (サムエル記)
- ダビデ (ユダ族の王) → イスラエルの王 (列王記)
- ソロモンの死後、北イスラエル王国と南ユダ王国に分裂
- → ここまでは歴史史料によって確認できない

歴史的・考古学的証拠

- 前1208頃、最古の「イスラエル」への言及
- その後、約350年間、碑文史料なし
- 前853、カルカルの戦い (「イスラエルのアハブ」)
- その後、アッシリアの王碑文にイスラエルの王が言及される
- 前9世紀後半、テル・ダン碑文 (「イスラエルの王」と「ダビデの家の王」)
- 前9世紀後半、メシャ碑文 (「イスラエルの王」)
- → この時代、イスラエルは地域の中でも強国

### 3. イスラエルからユダへ

#### ユダ王国

- 前8世紀後半以降、アッシリアの碑文に言及
- 前722/0、北イスラエル王国滅亡
- 前701、アッシリアによるエルサレム攻囲→アッシリアの属国に
- 前7世紀後半、アッシリアの衰退
- 前609、アッシリアの滅亡→エジプトによる支配
- 前597、第一次バビロニア捕囚
- 前587/6、エルサレム征服、第二次バビロニア捕囚

#### イスラエルはユダか？

- イスラエル滅亡前から、ユダの人々が自分たちをイスラエル人と考えていたかは不明
- アブラハム、イサク、ヤコブ、12部族という系図は後代に？
- イスラエル滅亡後、その亡民がユダへ流入か
- 同じ言語（ヘブライ語）、同じ神（ヤハウェ）
- アッシリア王碑文に言及される最初のユダ王アハズ（前8世紀後半）
- →イスラエルに代わってユダが歴史の表舞台に
- アッシリアの属国として繁栄を享受

### 4. ユダからユダヤへ

#### アッシリアからバビロニアへ

- 前7世紀半ば以降、アッシリアは凋落
- メディアとバビロニアの台頭
- バビロニアはアッシリアから独立
- アッシリアとエジプトの同盟
- メディアとバビロニアによるアッシリア滅亡（前609）
- パレスチナは一時、エジプトとバビロニアの係争地に
- バビロニアの勝利→ユダはバビロニアの属国に

#### バビロニア捕囚

- 歴史における大転換
- アイデンティティ喪失の危機
- 人間の戦い＝神々の戦い→排他的唯一神教へ
- エルサレム神殿の喪失→祭儀実施不能
- 捕囚の地における神殿は未発見
- →律法編纂、歴史の神学的解釈を書物へ（「申命記史」）
- アイデンティティを守るための殻としての律法
- 聖書編纂の一大契機

#### バビロニアにおけるユダ人

- バビロニアにおけるユダ人の活動を示す文書

2025年2月22日

- 奴隷ではなく、土地を貸し付けられた自由民
- 農地経営→成功して富裕になる人も
- →全員がユダに帰還したわけではない
- ヤハウエの名を持つ人々が多数
- それ以外の神の名を持つ人々も一定数存在

ユダからイエフドへ

- アケメネス朝ペルシアによるバビロニア滅亡
- キュロス王の宥和政策→捕囚からの帰還が可能に
- 民族共同体としての自治（王を戴かない）
- 神殿の建設→祭儀の再開→祭司階級の強大化→祭司>預言者
- 律法と祭儀の遵守
- 神から与えられている律法を守れば、直接的な神の言葉は不要
- 預言は直接的に民衆に訴える→社会的混乱の要因→預言の否定
- 聖書編纂続く

「真のイスラエル」

- サマリアのイスラエル人→ヤハウエを崇拜するが、正しい仕方でしていない
- 諸国民の末裔≠「真のイスラエル」ではない
- →ユダ人こそイスラエルの末裔

- サマリアの人々との確執

イエフドからユダヤへ

- アレクサンドロス大王による西アジア征服
- 大王死後、パレスチナはセレウコス朝シリアとプトレマイオス朝エジプトの係争地に
- イエフドからユダヤへ（ギリシア語：Ἰουδαία）
- ハスモン朝による独立（前140頃-前37）
- 聖書編纂継続

ディアスポラ

- ローマ帝国によるパレスチナ支配
- 66～74、第一次ローマ・ユダヤ戦争
- →神殿の喪失（70）
- 132～136、第二次ローマ・ユダヤ戦争
- ハドリアヌス帝によりエルサレムはローマ都市に
- ユダヤからシリア・パレスチナ（聖書におけるイスラエルの敵ペリシテから）へ改名（136-390）

5. おわりに

ディアスポラの地でのユダヤ教

- 神殿喪失→祭儀実践ができない
- →祭司階級の没落→ラビ・ユダヤ教の発展
- ローマ帝国内でユダヤ人が離散
- 聖書の固定化（「書物の宗教」へ）

2025年2月22日

- ディアスポラのなかで律法遵守を求める
- →周囲とは異なる存在であるがゆえの迫害
- 律法遵守ゆえのユダヤ人虐殺への恐れ→エステル記（前4世紀）
- セレウコス朝下での実際の迫害を反映→ダニエル書（前2世紀）

古代におけるユダヤ人の誕生

- 「ユダヤ人」の定義による
- ユダヤに住む人＝ユダヤ人、ユダヤ教徒＝ユダヤ人
- 「ユダヤ」が地名となったヘレニズム時代以降
- ヤハウエー神崇拜、聖書の正典化、律法遵守
- →バビロニア捕囚が決定的な契機
- ただし、それ以前からの伝統の発展上に位置づけられる

聖書からの引用（日本聖書協会共同訳による）

創世記 49章 28節

- これらすべてがイスラエルの十二部族である。これが、彼らの父（ヤコブ）が語り、祝福した言葉である。父は彼らをそれぞれにふさわしい祝福をもって祝福した。

ヨシュア記 3章 12節

- そこで今、あなたがたはイスラエルの諸部族から、部族ごとに一人ずつ、十二人を選び出しなさい。

列王記下 17章 5-8節

- アッシリアの王はこの国の全土に攻め上った。彼はサマリアに攻め上って、三年間この町を包囲した。そして、ホシエアの治世第九年に、アッシリアの王はサマリアを占領した。彼はイスラエル人を捕囚としてアッシリアへ連れ去り、ヘラ、ハボル、ゴザン川、メディア各地の町に住まわせた。こうなったのは、イスラエルの人々が、彼らをエジプトの地から、エジプトの王ファラオの支配から導き上った神、主に対して罪を犯したからである。彼らは他の神々を畏れ敬い、主がイスラエルの人々の前から追い払われた諸国民の風習と、イスラエルの王たちが取り入れた風習に従って歩んだからである。

列王記下 16章 7-8節

- アハズは、アッシリアの王ティグラト・ピレセルに使いを送ってこう言った。「私はあなたの僕、あなたの子です。どうか上って来て、私に立ち向かうアラムの王の手とイスラエルの王の手から、私を救い出してください。」またアハズは、主の神殿と王宮の宝物庫にある銀と金を取り出し、アッシリアの王に贈り物として送った。

2025年2月22日

列王記下 18 章 13 節

- ヒゼキヤ王の治世第十四年に、アッシリアの王センナケリブが、ユダの城壁に囲まれた町すべてに攻め上り、これらを占拠した。

列王記下 19 章 37 節

- 彼が信じる神ニスロクの神殿で礼拝していたとき、息子のアドラメレクとサルエツェルが剣で彼を打ち殺した。二人はアララトの地に逃れ、別の子エサル・ハドンが彼に代わって王となった。

列王記下 25 章 1-2 節

- そこで、バビロンの王ネブカドネツアルとその全軍は、ゼデキヤの治世第九年、第十の月の十日に、エルサレムに向けて出陣し、これに対して陣を敷き、周囲に包囲壁を築いた。都は包囲され、ゼデキヤ王の治世第十一年に至った。

列王記下 25 章 8-9 節

- 第五の月の七日、すなわちバビロンの王ネブカドネツアル王の治世第十九年に、バビロンの王の家臣、親衛隊長ネブザルアダンがエルサレムにやって来た。そして主の神殿と王宮を焼き払い、エルサレムの建物をすべて、大きな建物もみな火で焼き尽くした。エルサレムの周囲の城壁は、親衛隊長の率いるカルデア軍が破壊した。都に残っていたその他の民、バビロンの王に投降した者、その他の群衆は、親衛隊長ネブザルアダンが捕囚として連れ去った。

列王記下 25 章 18-21 節

- 親衛隊長は、首席祭司セラヤと次席祭司ツェファンヤ、門衛三人を捕らえた。さらに、戦士を監督する一人の宦官、都にいた王の側近五人、国の民を徴兵する將軍の書記官、都にいた国の民六十人を捕らえた。親衛隊長ネブザルアダンは、彼らを捕らえ、リブラにいるバビロンの王のもとに連行した。バビロンの王は、ハマトの地リブラで彼らを打ち殺した。こうしてユダは自分の土地を追われ、捕囚の身となったのである。

エズラ記 1 章 1-2 節

- ペルシアの王キュロスの治世第一年のことである。主は、エレミヤの口を通して伝えられた主の言葉を成就させるため、ペルシアの王キュロスの霊を奮い起こされた。王は国中に布告を発し、また文書をもって次のように述べた。「ペルシアの王キュロスはこのように言う。天の神、主は地上のすべての王国を私に与えられ、ユダのエルサレムに神殿を建てることを私に任された。」

エズラ記 1 章 5-7 節

- ユダとベニヤミンの親族の頭、祭司やレビ人など、神に霊を奮い起こされた人々は皆、エルサレムにおられる主の神殿を建てるために帰還しようと立ち上がった。周囲の人たちは、自発の献げ物のほかに、銀の器、金、財産や家畜、高価な贈り物をもって彼らを支援した。キュロス王は、ネブカドネツアルがエルサレムから持ち出して自分の神々の神殿に納め

2025年2月22日

ていた、主の神殿の祭具類を取り出させた。

エズラ記2章59節

- 次に記すのは、テル・メラ、テル・ハルシヤ、ケルブ、アダン、イメルから帰還したが、家系と血筋がイスラエル出身かどうかを明らかにすることのできなかつた者たちである。

エズラ記3章1節

- イスラエル人は自分たちの町にいたが、第七の月になり、民は一丸となってエルサレムに集まって来た。

エズラ記7章1節

- これらのことの後、ペルシアの王アルタクセルクセスの治世に、エズラという人がいた。(後略)

エズラ記7章6節

- このエズラが、バビロンから帰還した。彼はイスラエルの神、主が授けられたモーセの律法に精通した書記官であり、その神、主の手が彼の上にあったので、王は彼が求めるものすべてを与えていた。

エズラ記7章10節

- エズラは、主の律法を研究することと実践すること、イスラエルにおいて掟と法を教えることに専念した。

エズラ記7章26節

- (アルタクセルクセスからエズラへの手紙)「あなたの神の律法と王の法律に従わない者は皆、あるいは死刑、あるいは流刑、あるいは財産没収、または投獄によ

って、厳格に処罰されなければならない。」

列王記下17章23-24節

- ついに主は、僕であるすべての預言者を通して語られたとおりに、イスラエルを御前から退けられた。主はイスラエルをその土地から捕囚としてアッシリアへと連れ去られ、今日に至っている。アッシリアの王は、バビロン、クト、アワ、ハマト、セファルワイムから人々を連れて来て、イスラエルの人々の代わりに、彼らをサマリア各地の町に住ませた。そこで、彼らはサマリアを所有し、各地の町に住むことになった。

列王記下17章25-26節

- 彼らはそこに住み始めた頃、主を畏れ敬う者ではなかったので、主は彼らにライオンを送り込まれた。ライオンが何人かの人をかみ殺したので、彼らはアッシリアの王にこう言った。「あなたがサマリア各地の町に移り住ませた諸国民は、この地の神のしきたりを知りません。そこで、神は彼らにライオンを送り込まれたので、ライオンは彼らをかみ殺しているのです。この地の神のしきたりを知らないからです。」

列王記下17章27-28節

- そこで、アッシリアの王は命じた。「あなたがたが捕囚として連れ去った祭司の一人を、元いたところに連れ戻しなさい。連れ戻してそこに住ませ、その地の神のしきたりを教えさせなさい。」こうして、サマリアから捕囚として連れ去られ

2025年2月22日

た祭司の一人が戻って来て、ベテルに住み、どのように主を畏れ敬うべきかを教えた。

列王記下 17 章 29 節

- しかし、諸国民はそれぞれ自分たちの神を造り、サマリア人が造った高き所の宮に安置した。諸国民はそれぞれ自分たちが住む町でそのようにした。

列王記下 17 章 33-34 節

- 彼らは主を畏れ敬ったが、連れて来られる前にいた国々のしきたりに従って自分たちの神々にも仕えた。彼らは今日に至るまで、以前からのしきたりに従って行動している。主を畏れ敬うことなく、主がイスラエルという名を付けられたヤコブの子孫に命じられた掟と法、律法と戒めに従って行動していない。

列王記下 17 章 41 節

- これらの諸国民は主を畏れ敬ったが、自分たちの像にも仕えた。今日に至るまで、子や孫も、先祖が行ったように行っている。

エズラ記 4 章 1-2 節

- ユダとベニヤミンの敵対者は、捕囚から帰って来た人々がイスラエルの神、主のために神殿を建てているということを知りつけた。彼らはゼルバベルと親族の頭たちに近寄って来て言った。「私たちにも一緒に建てさせてください。私たちも同じように、あなたがたの神に伺いを立てております。アッシリアの王エサル・ハド

ンが私たちをここに連れて来た時から、この神にいけにえを献げています。」

エズラ記 4 章 3-5 節

- しかし、ゼルバベル、イエシュア、他のイスラエルの親族の頭たちは答えた。「私たちの神のために神殿を建てるのは、あなたがたではなく、私たちです。ペルシアの王キュロス王が命じたように、私たちが一つとなって、イスラエルの神、主のための神殿を建てなければならないのです。」するとその地の民は、ユダの民の士気を挫き、建築に取りかかる人々を妨害し、その計画を挫折させようと参議を買収した。それはペルシアの王キュロスの時代から、ペルシアの王ダレイオスの治世に至るまで及んだ。

エステル記 3 章 8-9 節

- ハマンはクセルクセス王に言った。「あなたの国のすべての州に、諸民族のうちに散らされ、分離されている一つの民族がいます。彼らの法はどの民族のものとも異なり、彼らは王の法を守りません。彼らをそのままにしておくのは、王にとって益ではありません。もし王が良しとされるなら、彼らを滅ぼすようにと命じる文書をお作りください。私は王の金庫に納めさせるために、銀一万キカルを量って担当の者たちの手に渡します。」

エステル記 3 章 10-11 節

- 王は手から指輪を外し、ユダヤ人の敵、アガグ人ハメダタの子ハマンに与えた。そして王はハマンに言った。「その銀はあ

2025年2月22日

なたに与えられる。その民はあなたがよいと思うようにしなさい。」

エステル記3章12-13節

- こうして第一の月の十三日に、王の書記官たちが召集された。彼らは、王の総督たち、各州の長官たち、および各民族の長たちに宛てて、ハマーンが命じたことをすべて書き記した。それは各州にはその書き方で、各民族にはその言語で、クセルクセス王の名によって書き記され、王の指輪で印が押された。この文書は急ぎの使者たちによって王のすべての州に送られ、第十二の月、すなわちアダルの月の十三日に、一日のうちに、ユダヤ人を若者から老人、子ども、女に至るまで一人残らず根絶やしにし、殺し、滅ぼし、また彼らの財産を奪い取ることとなった。

ダニエル書3章1-6節

- ネブカドネツアル王は金の像を造った。高さは六十アンマ、幅は六アンマであった。彼はこれをバビロン州のドラの平原に立てた。ネブカドネツアル王は人を遣わして、総督、長官、地方長官、参議官、財務官、法務官、保安官、および諸州の高官たち全員を集め、ネブカドネツアル王の立てた像の奉納式に参列させることにした。そこで、総督、長官、地方長官、参議官、財務官、法務官、保安官、および諸州の高官たち全員はネブカドネツアル王が立てた像の奉納式に集まり、ネブカドネツアルの立てた像の前に立った。伝令が大声で叫んだ。「諸民族、諸国民、諸言語の者たち、あなたがたに告げる。角笛、横笛、琴、豎琴、三角

琴、風笛、その他あらゆる楽器の音を聞いたなら、ひれ伏して、ネブカドネツアル王が立てた金の像を拝め。ひれ伏して拝まない者は誰でも、火の燃える炉の中に直ちに投げ込まれる。」

ダニエル書3章7-12節

- こうして、すべての民は、角笛、横笛、琴、豎琴、三角琴、その他あらゆる楽器の音を聞くやいなや、諸民族、諸国民、諸言語の者たちすべては、ネブカドネツアル王が立てた金の像を拝んだ。その時、カルデア人たちが進み出て、ユダヤ人たちを中傷した。彼らはネブカドネツアル王に言った。「王様がとこしえに生き長らえますように。王様、あなたは命令されました。『角笛、横笛、琴、豎琴、三角琴、風笛、その他あらゆる楽器の音を聞いた者は皆、ひれ伏して金の像を拝みなさい。しかし、ひれ伏して拝まない者は誰でも、火の燃える炉の中に投げ込まれる』と。ここに、あなたがバビロン州の行政官に任命したユダヤ人たちがおります。シャドラク、メシャク、アベド・ネゴです。王様、この者たちはあなたの命令を無視して、あなたの神々に仕えず、あなたが立てた金の像を拝みません。」